

2022年5月22日 午前礼拝  
「愛と恐怖」 説教者:堺希望伝道師

【引用聖句】 Iヨハネ 4:7~12

- 13 神は私たちに御霊を与えてくださいました。それによって、私たちが神のうちにおり、神も私たちのうちにおられることがわかります。
- 14 私たちは、御父が御子を世の救い主として遣わされたのを見て、今そのあかしをしています。
- 15 だれでも、イエスを神の御子と告白するなら、神はその人のうちにおられ、その人も神のうちにあります。
- 16 私たちは、私たちに対する神の愛を知り、まあ信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。
- 17 このことによって、愛が私たちにおいても完全なものとなりました。それは私たちが、さばきの日にも大胆さを持つことができるためです。なぜなら、私たちもこの世にあってキリストと同じような者であるからです。
- 18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。
- 19 私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。

【説教要約】

①御霊が与えられたことの意味

神は私たちに御霊を与えてくださいました。それによって、私たちが神のうちにおり、神も私たちのうちにおられることがわかります。

Iヨハネ 4:13

今日の箇所前半に出てくるキーワードは、「私たちが神のうちにおり、神も私たちのうちにおられる」ということばです。「おられる」とは「住む」とか「ずっと一緒にいる」という意味で使われます。クリスチャンと神様の関係は、お互いの内側にずっと住む関係ということなのです。

一番の証拠は、御霊が与えられているという事実です。一緒にいるということは、親密だということです。仲が悪くては一緒にいられません。また、一緒にいるにしても「隣の家にいる」と「隣に座っている」とでは距離感が違います。

神様と私たちは、「互いのうち」にいる関係なのです。人間はからだでは人に触れることまで可能ですが、心のうちには入れません。しかし神様は近い距離どころか、内側にいることができるのです。それは、神の心である御霊が与えられているためです。

いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかには、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです。

### 1コリント 2：11-12

自分の心の内を明かすことができる相手は、誰でも良いわけではありません。親しく、信頼できる相手にこそ他の人には明かせない心の内を言えるものではないでしょうか。神様はそれ以上に、単に心の内を明かすのではなく、心そのものである御霊をクリスチャンに下さったのです。

これは、神様がどれほど私たちが愛されているのかという証拠であり、しかも私たちに信頼を置いてくださっているという証拠でもあります。だから私たちはどんな時でも「神は私たちとともにおられる」と言うことができます。

また同じように、私たちも心の内を神様に打ち明けても大丈夫だということです。御霊は、どんな時も私たちのうちにおられます。私たちが元気な時、心が晴れやかで悩みがない時もそうです。また、私たちが落ち込んでいる時、悩みや不安で心が締め付けられている時も御霊はうちにおられます。私たちのすべてを知っておられる神様は、私たちに色々な面があることをご存知の上で、私たちが信頼し、ご自分の心である御霊を与えて下さったのです。

ですから、祈れることはクリスチャンの特権なのです。それはちょうど、最も親しい人にあるものを語るようなものです。嬉しい時は喜びを分かち合い、助けが必要な時は助けを叫び、苦しく先が見えない時はそれを聴いていただける、それが祈りなのです。他の誰に対しても明かせない心の内も、神様に対してなら明かしても大丈夫です。なぜなら、神様は不安なときの私たちも変わらずに愛し、信頼してくださっているからです。

このような神様との関係をただ一つ、隔てるものがあります。それは心の内を隠すことです。どんな心の内を明かしても壊れない関係を邪魔するのは、心の内を明かさないことだけです。明かせないのは、色々な理由があるからだとは思いますが、一言で言うならば「恐れがあるから」ではないでしょうか。「これを明かしたら今までのような関係ではいられなくなる」「嫌われる」「見捨てられる」。このような恐れから、本心を神様に見せなくなるのかもしれない。

最初の人、アダムとエバは、神様と完全な愛の関係の中にいました。しかし、唯一してはならないと命じられていた「善悪の知識の木の実」を取って食べてしまった時、彼らは恐れたのです。

そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。  
神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」  
彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」

すると、仰せになった。「あなたが裸であるのを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。」

人は言った。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」

### **創世記 3 : 8-12**

アダムとエバは、それまで神様の前で裸であったのを恐れませんでした。罪を犯した時、それが恐ろしくなって神様から隠れました。自分のありのままの姿が明らかになるのを恐れたのです。神様はアダムに罪を犯したことを問い詰めました。彼はどうしたのでしょうか。恐ろしさのあまり、罪を認めることができず、妻に責任転嫁したのです。「神様に罰せられる」と思ったのです。しかし今や、神様は私たちを罰するのではなく、和解してくださったのです。神様の約束はこうです。

もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

### **Iヨハネ 1 : 9**

すべての罪はイエス様によって赦されます。ですから、その赦しを信頼して、罪さえも神様に告白することが一番重要です。罪を隠すことが、神様との距離を作る原因なのです。悔い改めは恵みです。

## **②互いのうちに住むことができる理由**

私たちは、御父が御子を世の救い主として遣わされたのを見て、今そのあかしをしています。だれでも、イエスを神の御子と告白するなら、神はその人のうちにおられ、その人も神のうちにあります。

私たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。

### **Iヨハネ 4 : 14-16**

さて、神様は私たちを最も愛する者、最も信頼する者と認めてくださいました。その証拠が御霊をくださったという事実だと見てきました。しかし、それは神様がお人よしだからそうしてくださったわけではありません。機械のように自動的に私たちと神様が、互いの内側に住む関係になったわけではありません。そこには、神様の究極的な犠牲があったのです。

それは、「御父が御子を世の救い主として遣わされた」という証です。

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

### **Iヨハネ 4 : 9-10**

神の子であるイエス様が、人間としてこの地上にやって来られたのは、神のみこころを実現するためでした。なだめの供え物とは、旧約聖書で律法の中に決められているいけにえのことです。イスラエル民族は神様によって、毎日ささげるいけにえ、罪を犯したときにささげるいけにえ、毎年民族のためにささげるいけにえなどが定められていました。何か罪を犯した時だけでなく、生きているだけで神様にいけにえをささげなければならなかったのです。

その意味は、「本当は罪のために、私自身が神様に滅ぼされなければならないが、それを動物に身代わりになってもらっている」という身代わりのためでした。「生きているだけでも滅びなければならない」、あるいけにえの意味はそのようなものでした。そのようないけにえ制度自体が、「私たちには自分で自分を救うことができず、本当のいけにえが必要である」ことを示していました。

また、すべて祭司は毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえをくり返しささげますが、それらは決して罪を除き去ることができません。

しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、それから、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。

キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。

#### ヘブル 10 : 11 - 14

本当は、私たちは滅びるべき存在だったのです。そのような存在であると神様は知っていてなお、イエス様を送り、私たちの罪の罰を身代わりとして負わせたのです。本当のいけには、イエス様の十字架だけです。そこで流された血があるから私たちは罪を赦されるのです。

私のためにけなされ、痛めつけられ、犯罪者として殺されたイエス様。この方は死んで3日後によみがえられました。この方を自分の救い主として信じる人は、神様と和解をするのです。いけにえがないと赦されない罪人を、イエス様といういけにえを受け取ってくださり、赦してくださるのです。

神様の赦しとは、それまでの罪をきれいさっぱり終わったものとしてくださることです。先ほどのヘブル書の箇所の続きですが、

聖霊も私たちに次のように言って、あかしされます。

「それらの日の後、わたしが、彼らと結ぼうとしている契約は、これであると、主は言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの心に置き、彼らの思いに書きつける。」またこう言われます。

「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」

これらのことが赦されるところでは、罪のためのささげ物はもはや無用です。

#### ヘブル 10 : 15 - 18

「この前も同じことをした」とか「何度言えばわかるのか」と言われたいのです。そうでなければ、本当に赦されたのか分からず、まだ赦されていないかのようにおびえて生きなければなりません。しかし神様は、イエス様にあつて、「もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない」と宣言してくださいませ。

私たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。

### **Iヨハネ 4 : 16**

このようなわけで、イエス様を自分の救い主として信じるということは、神様が自分を愛しておられることを信じることであります。この愛は減ることも止まることもありません。今日もイエス様を与えて下さった日と同じように愛してくださっているのです。このように、神様がすでに罪のためにイエス様を犠牲にしてくださったので、もはや信じる人と神様の間を隔てるものはありません。

かつてアダムは、さばきを恐れて心を隠し、神様から離れました。しかし今は、イエス様によってさばきは終わったことがはっきりと示されたので、私たちはどんな心の有様も神様の前に見せて良いのです。

### **③愛と恐怖は水と油**

このことによって、愛が私たちにおいても完全なものとなりました。それは私たちが、さばきの日にも大胆さを持つことができるためです。なぜなら、私たちもこの世にあってキリストと同じような者であるからです。

愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。

私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。

### **Iヨハネ 4 : 17-19**

聖書は、この世の終わりについて語っています。それは、今まで生きてきた人間すべてが神様の前に立ち、自分の生き方について神様から問われる日です。

また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。

また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。

海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行いに応じてさばかれた。

それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。

いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

### **黙示録 21 : 11-15**

自分の生き方をさばかれた結果、いのちの書に名の記されていない者は火の池である地獄に投げ込まれることとなります。このいのちの書は、イエス様を自分の救い主と信じた人の名が記されている書物です。

どんな功績も立派な生き方も、自分を救うことはできません。ただイエス様を信じることによってのみ、人は救われるのです。このさばきは、語るに尽くせませんが、クリスチャンであっても本当に恐ろしいものです。過去も未来も外側も内側も知っておられる神様にさばかれるのですから。

しかし、今日の箇所は、「さばきの日にも大胆さを持つ」ことができると教えています。それは、「全き愛」によってです。この全き愛とは、神様が私に向けている全き愛のことです。神様の愛を本当に知ることによって、神様の前でも大胆さを持てるというのです。

これは、アダムが罰を恐れて隠れたのと、ちょうど真逆です。自分の恥ずかしいことや、とも見せられないようなことすべてが明らかになっても崩れない完全な信頼関係があるということです。

わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです。

### **ヨハネ 17:23**

これは十字架の前夜にイエス様が祈られたことです。父なる神様がイエス様を愛されたように、私たちも愛しておられる。これが神様にとってのクリスチャンです。イエス様によって私たちは救われただけでなく、イエス様と同じ価値を神様は私たちに認めておられるのです。

とても、イエス様に似つかわしくない存在だと、他でもない私は自分を知っています。しかし、どんなに私が愚かでも、落ちこぼれでも、私にはイエス様と同じ価値があるのです。イエス様を信じて救われた人のことを、神様はそのように見てくださるのです。だから、「さばきの日」でも大胆さをもてると言います。神様が、完全に私を愛しておられるからです。

さて、そのような神様の愛を、深い所で確信しているかどうか知る点検方法があります。それは、「何に恐れを抱いているか」自分に問いかけることです。「全き愛は恐れを締め出す」のです。愛と恐れは同居できないのです。水と油です。アダムが神の愛を信じられず恐れのように、私たちも心のどこかの面で愛ではなく恐れを持っているかもしれません。

私は、この箇所を読んで考えた時、自分の父親に対して恐怖を持っていることをよく自覚しました。父に愛されなかった印象に始まり、虐待された恐怖、父親とはこういうものなんだという絶望、そして「自分も同じかもしれない」という恐怖です。このことは私に影を落とすように、自信を持つことが難しかったり、父に似た雰囲気を持つ方に出会うと、その方がどのような方か知ってもいないのに身構えてしまう性質をもたらしました。この部分が刺激されると、私は大いにうろたえ、動揺し、まるで神様なんていないかのように不安に陥ります。

これは、私がおの部分が、まだ神様の愛に確信を持っていないからです。この心の部分に触れることさえも私は嫌ですが、それもまた恐怖心から来ていることを知っています。

しかし、幸いなことに、どのようにその部分が変わることができるのか、16 節に書いてあります。

私たちは、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。

#### **Iヨハネ 4 ; 16**

ただ、神の愛を知ることによってその部分は癒やされ、あるいは矯正され、まっすぐになります。必ず神様はそのように導いてくださいます。「恐れる者の愛は、全きものとなっていない」。これはさばくためにあるのではなく、イエス様にもっと繋がるための愛のことばです。私の救い主が、私のすべての面で救い主であるという確信に進むためです。

最後のみことばは、神の愛を信じる私たちがいつも立つべき場所、宣言することばです。

私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。

#### **Iヨハネ 4 : 19**

生活のすべてにおいて、このことばが実現することを切に願うのです。そのために主が、恐れに支配されている心の場所を、ただ主の愛を知ることによって変えてくださることを祈ります。¥本当はもっと大きく、素晴らしい神様の愛をもっと知り、「私は愛しています！」と神様にもっと投げ返したいです。

どうか皆様も、全き愛を追い求めてください。聖書は、神の愛は完全であると述べます。それが本当に自分の心の実現した時、神様の前に何を見られても崩れる事のない関係、大胆さを持つことができます。それには、自分の恐れと向き合い、神様に癒やしていただくことが必要なのです。みこころならば、今日一步、皆様が神様に心の内を明け渡せますように。

最後に暗証聖句を読みましょう。

愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。

愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

#### **Iヨハネ 4 : 7-10**